二次元ぷち文庫

試し読み版

大熊狸喜

表紙イラスト：緋山狐

無敵戦隊ヒカクレンジャー

最終回

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『無敵戦隊ヒャクレンジャー　最終回』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

無敵戦隊
ヒカクレンジャー
最終回
大熊狸喜
表紙／緋山狐
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ヒャクホワイト

本名は白鳥(しらとり)ハルカ。正義感の強い少女。

ダークゼロス

ダークエンパイアの皇帝。

二〇××年、宇宙の彼方から突如襲来してきた悪の帝国「ダークエンパイア」によって、世界は侵略の危機に晒されていた。

皇帝ダークゼロス率いる特殊怪人たちに対し世界の軍事兵器は全く歯が立たず、人類はただ暴君に屈するしかないのかという絶望が人の心を蝕んでゆく。

全ての人々から笑顔が失われかけたその時、人類の前に希望の戦士たちが現れた。

「無敵戦隊ヒャクレンジャー！」

五色に分けられた超越科学のパワースーツを身に纏った五人の戦士たちは、凄まじい力で次々と怪人たちをなぎ倒し、地球人類を絶望から救ってゆく。

人々を襲う帝国の戦闘員や怪人を討ち、巨大怪人に対しては巨大合体ロボで立ち向かう。その姿はいつしか、世界の人々の希望となっていった。

そして一年に渉る激闘の果て、正義の戦隊は遂に悪の帝国を壊滅寸前にまで追い込んでいた。そして悪の皇帝は、最後の勝負に出ようとしていたのであった――。

「ここが…ダークエンパイアの秘密本部」

人の立ち入りが極めて困難な山深い森の奥に、ひっそりと口を開ける小さな岩穴。

誰にも気付かれないであろう洞窟の入口で、ヒャクレンジャーの一人、ヒャクホワイトこと白鳥ハルカは一人息を呑んでいた。

これまで世界中の情報網と協力をして探しても、手がかり一つ見つけられなかった敵のアジト。ヒャクレンジャーは五人に分かれて捜索をしていたが、怪しい車を見つけた正義の少女はバイクで追跡をして、この洞窟の前に辿り着いていた。

マウンテンバイクのハンドルにヘルメットを引っかけた戦隊少女は、用心深く洞窟入口の岩壁に背中を付けて隠れる。

セミロングのツインテール黒髪が風に揺れて、クリクリとした大きなタレ目が暗い洞穴を注視していた。通った鼻筋と引き締められた唇は共に小さく、豊かな黒髪に包まれた愛顔も手伝って年齢よりも幼い印象だ。

白いシャツの上には白い戦隊ジャケットを羽織っているが、それでも目立ってしまう程の、八十五センチ巨乳。しかも百五十五センチに満たない小柄な身体の為に、カップ数はFサイズ。

細いお腹から広がる腰はショートジーンズに包まれながらも、パツンとした肌弾力を感じさせる。更にツルツルの少女腿が健康的で大胆に露出し、ヒザ下までの太いブーツがややロリータチックな愛らしさを魅せていた。

真面目な戦隊少女の小柄な身体と愛顔とギリギリサイズな巨乳は、幼女の愛玩性と女性の柔魅惑を凝縮したような、最上級の媚魅力を存分に発揮していた。

左手に巻かれた、通信機でもある変身ブレスを口許に寄せ、戦隊少女はふと思い立つ。

「仲間に連絡を――ううん、その前にちゃんと確かめないと…！」

十代後半のハルカはヒャクレンジャーの中でも最年少で、戦闘能力もチーム最下位であり、時には仲間の脚を引っ張ってしまう事もある。本当は戦闘よりも、保母さんなどのお姉さん職業の方がきっと似合っている。

それでもこの少女が人々の平和の為に闘うのは、それだけ心優しいからなのだろう。

頼れるリーダーのレッド、クールなブラック、優しいブルー、知的でセクシーな女性のピンク。そして闘う仲間であっても、どちらかと言えばムードメーカーに近いヒャクホワイト。

仲間たちはフォローしてくれるし励ましてくれるが、真面目で正義感の強い黒髪少女はチームの迷惑にはなりたくなかった。

（もし間違いだったら、また迷惑になっちゃうわ…私だって、ちゃんとできる…っ！）

洞穴の奥は暗くてよく見えない。ツインテールの正義少女は注意深く敵アジトへの侵入を開始した。

ゆっくりと慌てず、しかし迅速に、真っ暗で足場の悪い洞窟の奥へと歩を進める。そして数百メートル進んだ洞穴の最奥に、侵入少女は小さく縦に細い光を認めた。岩壁に隠れながら人工的な光の正体を探る。

洞窟の行き止まりと思われた場所は、岩に模して巧妙に隠された扉であった。数ミリだ

け開かれた扉からは光が漏れ、その奥にはとても地球の物とは思えないような、有機的な機械の壁に囲まれた空間があった。

「――！　間違いないわ、ここがダークエンパイアの本拠地っ！」

遂に敵アジトを確認したハルカは、小さな声で仲間への通信を送る。しかし――。

「こちらホワイト、ダークエンパイアのアジトを発見――きゃあっ！」

――ビカッ！

突然周りから数本の眩しいライトを充てられた。暗闇の中で一人照らし出されて警戒する正義少女の周りが、帝国の戦闘員たちに取り囲まれる。無機質な鉄のマスクと全身斑模様の戦闘員たちは、それぞれ大型ナイフや棍棒などで武装をしている。

洞窟入口の方から重い岩の音が聞こえた。どうやら侵入してきた入口は、岩によって完全に塞がれてしまったようだ。

身構える少女の前に帝国のクラゲに似た怪人と、漆黒の皇帝が現れた。初めて対面する人類の敵王に、ハルカは緊張を隠せない。

「我がダークエンパイアへようこそ。初めての客人、ヒャクホワイト」

「あなたが…皇帝ダークゼロス！」

全身黒ずくめな皇帝は、角の生えた皇帝帽子と鋼鉄の鎧、黒いマントを靡かせた、二メートルを超える大男だった。

黒い顔面はやはり無機質で、青く鋭い眼光が頭上から侵入者を見下ろしている。冷静な瞳がニヤリと笑うと、暗黒のダークゼロスは部下怪人への命令を下した。

「客人は丁重にもてなせよ、殺さない程度にな」

「ハハッ、ダークゼロス様」

主の命令を受けたクラゲ怪人と戦闘員たちによって、逃げられないよう少女に対する包囲が縮められてゆく。

周囲を素早く見回し十数メートル程の空間である事を確認した戦隊少女は、再び皇帝を見据えると、必勝の決意で宣言をする。

「既にこの場所は通信したわ、もうすぐみんなが駆けつけてくる。ダークゼロスっ、今日こそあなたの野望が潰える日よ！」

変身ブレスに右指を添えると、正義のツインテール少女は変身を開始した。

「ハイパーチェンジっ、ヒャクホワイト！」

清らかな掛け声と共にハルカの全身が光に包まれ、少女は戦士へとその身を変える。

着用していた衣服が一瞬で光の粒子に変換されると、少女の全裸肢体に隙間なくフィットしたハイパースーツが形成された。

シンプルでありながら白鳥を連想させるフルフェイスのマスク。目の周りは帯状に黒いゴーグルで口許は銀色に輝き、表情は見えないがその分装着者の意志を、見る者には想像

させる。
全身純白に輝くスーツ。腰には黒い艶のメタルベルトが締められ、手足は銀輝のグローブとブーツで飾られていた。
そして腰にはレーザーソードの機能を持つ小型のビームガン。変身を終えた戦隊少女は再び戦闘の構えを取ると、自らに気合いを込めて戦闘を開始した。
「いくわよっ！」
ウヒュギュッ、ヒュギュウウゥゥッ！
マダラ戦闘員たちは四方から襲い来るが、純白の戦士は素早くかわして一撃を加える。格下で無個性な戦闘員とはいえ、人類の携帯火器が通用しない相手である。パンチが逸れて洞窟の岩などにぶつかっても、岩壁の方がウェハースのように粉砕される。
そんな、人類科学を超越した敵兵隊を、一体一撃で打ち倒してゆく戦隊の少女戦士。
「ィヤっ、はぁっ！」
ヒャクレンジャーのハイパースーツは、ダークゼロスに叛意する心優しき異星の科学者からもたらされた、超越科学技術の結晶である。五人集まると特殊スーツのパワーは増幅されて帝国の怪人を軽く凌駕（りょうが）するのだが、各個人のスーツパワーだけでも戦闘員など敵ではない。
「ェエイっ！」

ギュヒュウウッ！

最後の戦闘員を倒したホワイトは、携帯ビームガンであるヒャクショットを抜いて皇帝に向ける。自身で掴む闘いの勝利が目の前に迫り、最年少の戦隊少女は弥が上にも気持ちが高揚をする。

（私が、敵を倒してみんなを護る…っ！）

「皇帝ダークゼロス、覚悟っ！」

しかし銃を向けられた暗黒皇帝は、心底愉快そうに笑っていた。

「我に銃を向けるとは…無知で無礼な女だ」

「くらえっヒャクショットっ！」

必勝の一撃が放たれた次の瞬間、クラゲ怪人が盾のように立ちはだかる。赤いビームは怪人の胸に命中すると、何事もなかったかのように拡散消滅されてしまった。

「そ、そんな…っ！」

「我らの皇帝にぃ、銃口を向けた罪ぃ、償ってもらうぞおぉ、ブジュヒヒヒ！」

クラゲ怪人は不気味に笑いながら近づいてくる。ホワイトは懸命にビームガンを撃つものの、全ての攻撃はヌメるクラゲの体表に無効化されてしまう。

攻撃を繰り出しながら、次第に壁際へと追い詰められてゆく純白の少女戦士。

「どぉしたぁ…及び腰だぞぉ、ヒャクホワイトォ…」

（このままでは……よしっ！）

クラゲ怪人に銃を向けたまま狙いを澄まし、撃つと見せかけて横に跳躍、背後の皇帝を撃つ。しかし直前、ヒャクホワイトはクラゲ怪人の伸ばした触手によって、ビームガンを叩き落とされてしまった。

「あぅっ、ヒャクショットが――あぁっ！」

武器を失った戦隊少女は更に数本の触手を伸ばされて、首や両腕、胴体や両脚などを絡め取られ、怪人の胴体前面に「T」形の姿で拘束をされてしまった。

クラゲ怪人の濡れた触手が、純白全身タイツに包まれた少女戦士の肢体に絡みつく。

ヌゅるルィ、ペトちュ、キュルギュウゥ。

「うぅ……この、ぉ…っ」

個人のスーツパワーを遥かに凌ぐ怪力で捕らえられて、濡らされて締め上げられる仮面全身タイツの少女。囚われ戦隊戦士のマスク頬に、暗黒皇帝の手が充てられる。

「捕らえたぞ、憎きヒャクレンジャーめ」

「くっ…私を捕らえたって無駄よ、もうすぐ仲間たちがやってくるわ」

少女の警告を聞いたダークゼロスはしかし、高らかに笑った。

「フッハッハッハ、それは叶わぬ願いだよ。なぜならこの基地には妨害電波が張り巡らせてあるのだからなぁ」

「な、なんですって――⁉」
（それじゃあ、私の送った通信は…）
驚愕する純白戦士。更に続く敵の言葉に、ハルカは自分の耳を疑わされる。
「オマエを捕らえる為に、ワザと目立つ車を使い追跡をさせたのだ。そうとも知らずにノコノコと…クックックッ、驚く程簡単だったぞ、最弱マヌケなヒャクホワイト君」
「そ、そんな……っ！」
自分から敵の罠に飛び込んでいたのだ。真面目な少女は自身の迂闊さに、思わず涙がこぼれそうになる。
「クラゲダーク、この女のスーツから全てのパワーを吸収しろ。変身が解けない程度にな」
「御意ぃ、それではぁ…」
磔にされた純白少女の首筋が、クラゲダークと呼ばれる怪人の口吸盤に吸いつかれる。
「ひっ――！」
ヌメリと濡れた感触に鳥肌が立つ。そしてT字拘束のヒャクホワイトは巨乳と股間に触手を食い込まされながら、首筋からエネルギーを吸収され始めた。
ズチュルッ、ヂュウウゥゥゥッ！
「きゃあぁっ――ぁぅうあっ…！」
（ス…スーツの、パワーが…っ！）

囚われ戦隊少女はスーツの上から、若く張りのある肢体を電撃ムチの先端でツツゥッと撫で上げられる。

「ひぅっ……はぁぁ…」

催淫電撃で敏感にされた肌は、極薄スーツ越しの触感までをも敏感に拾わされてしまう。思わず過敏な艶声がこぼれ、フルマスク中では頬が上気し熱を上げられる。

拷問を受けて身悶えさせられる、人類の希望ヒャクホワイト。絶望を誘うその姿を尚も全世界に知らしめようと、暗黒の皇帝は戦隊少女に対し更なる恥責めを実行する。

「こう見えても私は芸術家肌の男でねぇ……もっとも、無知で無感性な民衆共には理解できぬようだかな、フフ」

ダークゼロスは邪眼を輝かせると再び獲物少女と距離を取り、ムチ先端から小さな刃を出現させる。敵皇帝の冷徹な笑いと無機質なナイフの輝きに、正義少女の背筋が震えた。

「一体…なにを言っているの……」

「責められる女体には相応しい姿があるのだよ。このようにな！」

言うや早く、高速でムチを振るう暗黒のサディスト。

――ッピヒュッ、ヒヒュンッ！

（ひっ――！）

スーツ肢体の表面を黒い瞬風が過ぎる。ハルカが息を呑んだ次の瞬間、女体の上で男の

ちょっちシーン試し読み
ここからスタート！

言葉が実現された。
人類の希望、ヒャクレンジャー女性戦士のスーツ胸部がFカップバストの形に沿って、綺麗な縦長の楕円形に切り取られてしまう。
パラ――パラリ……。
弱体化された特殊スーツは紙程の抵抗も見せず、あっさりと切り裂かれてしまった。
胸部露出という恥姿にされた、囚われの少女戦士ヒャクホワイト。
「き――きゃあぁぁっ！」
全世界に向けて自分の乳房が露出をさせられて、ハルカは思わず羞恥の悲鳴を上げてしまった。
隙間なく肢体にフィットした純白のスーツから、乳房だけが露出をさせられているフルマスクの少女。切り抜かれた孔は乳房の上端から下乳全体までの柔曲線を完全にトレースされていて、スーツのラインを全く壊す事なく双乳だけを完全露出させられていた。
丸くて巨大な水滴形の、しかし重力に負けず前方に突き出した、若さと柔らかさと充分な実りを見せつけるような、少女戦士の双媚乳房。
ホワイトの名に相応しい白い乳肌は怪人の淫拷問で薄い桜色に染まり、汗と怪人淫液でシットリと濡れ艶を帯びている。先端の媚突は小さく桃色に膨らんでいて、少女の潔癖さと清潔さを存分に表していた。

無駄な装飾のないフルマスクの全身ピッタリ純白スーツから、肌色の艶乳房を露出させられた少女戦士の姿は、皇帝の言うとおりミスマッチで生々しく淫靡にさえ映っていた。
「うぅむ、やはり女とは淫らな存在。乳房を露わにしてこそ表される存在証明よ」
自らのみの芸術感性で悦に浸る暗黒皇帝。敵に双乳を視姦されて、ホワイトの理性が恥辱で焦がされてゆく。
「――ぅうぅ…っ！」
更に周囲のモニターからも世界中の人々の、心配と好奇の視線を剥き出し双乳に向けられてしまう。
（いやぁ…みんな、見ないでぇ……）
柔乳房に、先端媚突に、人々の視線を感じさせられる。恥ずかしくて思わず身をよじると、八十五センチの若処女乳房がタプリと弾んで小さく震える。
触手に捕らえられて顔を逸らす事さえできないマスクの中で、ハルカは視線に耐えられず僅かな間、強く瞼を閉じてしまう。
勇ましい少女の弱々しい羞恥姿に、下品な興奮を覚えるクラゲ怪人。
「ぉオマエのオッパイぃ、でぇっかくてぇ、イヤらしいなぁぁ」
「なっなによ――ぅあぁ…っ！」
剥き出しにされた双巨乳房が濡れ透けたクラゲ触手に寄せ上げられて、少女の目の前で

プルプルと揺すられ弄ばれる。生まれて初めて他者の手に触れられる自身の乳房を見せられて、理性がショックを与えられていた。

――ぷるる、たぷルぷるんっ。

（わ、私の胸が…怪人の手で……）

艶濡れる裸の乳房が男怪人の手で弄ばれて、柔らかいプリンのように上下左右に弾んで震えさせられる。その嬲られ媚姿に。

（も、弄ばれる、女の子の胸って…イヤらしぃ……）

処女であるハルカ自身の脳裏は、女だけが持つ官能性と淫靡性を、一瞬強く感じさせられてしまった。自分の乳房が一方的に他者の手で舐られる恥辱を忘れ、無意識にも魅入られてしまう。

「ほほおぉぉ、正義の戦士様はぁ、自分のオッパイにぃ、見入ってやがるぜぇぇ」

「――!!　ち、違いますっ私は、その…っ！」

世界中のカメラの前で事実を言い当てられてしまい、敵に対して思わず敬語で反論をしてしまった。恥ずかしすぎる恥態にマスクの中では耳まで上気し、頬には恥汗が流れる。

「そぅかいそぅかいぃ、ブシュヒヒィ」

少女戦士は簡単に動揺を見抜かれ暴かれ、更に拷問クラゲによってより大きく強く少女爆乳を揉み上げられた。少女理性が官能と羞恥によって、淫波状責めにされてゆく。

もみュり、タぷりュ、むっちュむプリゅりる、たぷるりゅ。
「ぁあはく――は…はぁ――んんん…っ！」
（お、おっぱぃ――感じ、ちゃうぅ…っ！）
乳肌に触手が食い込まされる度に、乳房全体が柔軟で弾力溢れる媚変形をさせられてしまい、処女双乳は微弱な性甘電と感じさせられてしまう。
柔胸脂肪が熱を持たされて、心臓から背筋を通って最奥の子宮までもが、性感媚熱を持たされてゆく。
官能に擽られる処女腰が無意識に、性感から逃れるように拙（つたな）くくねられてしまう。そんな戦隊純白少女は、敵皇帝の嗜好で尚も恥ずかしい姿へと強要されてゆく。
「肉体と羞恥、それこそが女の全てだ！」
再びムチが振るわれると、正義少女は肌を隠す繊維を更に奪われた。
……ハラリ…。
「うぅ――く…っ！」
肋骨のラインに沿うように、両脇腹から背中全てが剥き出しにされて、脇の下も円形に露出をさせられる。お腹だけは、ベルトのバックルから双乳の乳頭先端に向かっての逆台形に、純白繊維が残された。
剥き出しの乳房を引き立たせるように脇とウェストの括れを強調された、女を見せつけ

させられる恥辱姿の半裸上半身。
「こんな……姿など…！」
恥ずかしさを必死に堪え、気丈な反抗意志を口にするヒャクホワイト。そんな少女戦士の言葉など聞く気もない男は、女体に向けた視線を胸から腹部へと移行させてゆく。
「次は下半身だ」
「えっ――⁉」
皇帝の言葉に一瞬心臓を貫かれる。只でさえ、戦隊スーツのまま乳房を露出させられるという恥辱姿にされているのに、敵の男は更に肌露出をさせようとしているのだ。
「さぁて、どのように剥けば官能的かな？」
「ゃ、やめてょ……！」
暗黒サディストの手の中で、繊維を切り裂く刃のムチが冷たく光る。ハルカは思わず腰を引いて、小声で許しを乞うてしまった。
正義少女の思わぬ弱気に、ダークゼロスは歓喜を露わにする。
「そうか、では剥いてやろう。そぅらっ！」
「っひぃっ――！」
――ッシュピュヒュッ、パラはらり…。
皇帝の目が怪しく光り、三度高速のムチが振るわれると、戦隊少女は更なる恥姿に追い

込まれてしまった。
腰部のスーツ繊維が奪われる肌感触に、少女戦士の思考が一瞬停止をさせられる。
「――――」
戦隊少女スーツの下半身は、ブーツ先端から腿の付け根まで、だけが残されていた。
大きく剥き出しにされた腹部と全露出をさせられたお尻は、残されたベルトと相まって裸肌である事をより強調させられている。
左右の腰外側には数センチの幅でスーツ繊維が残されていて、まるで淫靡なガーターベルトのように変えられてしまった。
少女戦士の下半身露出映像を世界中に流そうと集まる羽虫カメラの羽音で、ハルカは残酷にも停止していた思考を戻されてしまう。
「――っ!!　っきゃあああぁぁぁっ！」
剥き出しの下半身が無数のカメラに接近されて、正面や斜めの上下からと、容赦なく撮影をされてゆく。腰を捻(ひね)って逃れようとしても、囲まれていてはかえって自ら様々な角度での、割れ目映像を公開させられてしまう結果にしかならなかった。
引き締まったお腹から恥丘へと続く官能ラインは、少女らしい張りで魅惑的な艶を見せている。処女丘には極薄い恥毛しかなく、柔らかくピタリと閉じられた桃色の処女媚構は全く隠されていない。

発達したお尻は、細いウェストに巻かれたベルトから絞り出されたように柔らかい曲線を描き、年齢以上の発達と若い弾力を存分に見せつけていた。
羽虫カメラには小型ライトまで付いていて、処女媚構が影で見えなくなる事もない。
レンズの視線とライトの温熱を媚割れに感じさせられると、撮影されている事が更に強く意識させられてしまった。
「いやぁ、あっち行ってぇ……っ！」
強烈（きょうれつ）すぎる羞恥に理性が襲われ、少女戦士の意識が混乱と焦燥に落とされてゆく。目の前のモニターには、画面を埋め尽くす程にまで近接した恥肌の映像が映し出されていた。
「うっ映さ、ないでぇ……っ！」
戦隊少女戦士が羞恥で腰を逸らさせる度に、薄い腹部脂肪と柔らかいお尻頬がプルリと跳ねる。正面に斜めにと姿を移す割れ目と尻谷間の映像は、それだけで媚肉溝の形と深さを見る者に確信させてしまった。
フルマスクの全身特殊スーツは各所を切り取られ、両脇と二つの巨乳房は剥き出しにされて下腹部前面もお尻も、女性恥処の全てを完全露出させられている。
まるで、特殊スーツが最初からそのようにデザインされているかとさえ思わせる、綺麗な切り取りライン。
その姿は人々から、正義の少女ヒャクホワイトの元の姿さえ忘れさせてしまう程、淫ら

で強烈な印象を植えつけていた。
全世界の視線に身悶えする戦隊少女。
(む、胸が…ぁそこが……みんなの、視線でぇ……)
好奇の視線が物理的な刺激となって、肉体局所を淫貫通されて、子宮性熱までもが高められてしまう。
どくん、どくん、どくん、どくん!
どちらに肢体を向けてもあらゆる角度から秘処を撮影公開されてしまう、逃げ場のない継続羞恥。
余りの恥ずかしさにハルカの鼓動は速められて、理性が焦燥をさせられて、思考能力までもが追い詰められてゆく。
逃れられない視線に悩乱するヒャクホワイトの姿に、クラゲダークは汚れた喜びで淫笑をする。
「はぁずかしいかぁ、ヒャクホワイトぉ。ならばもっとぉ、恥ずかしくしてやるよぉ」
「な――きゃぁっ!」
半透明なクラゲ濡れ触手が少女の両脚に巻きつけられた。両足首の拘束具が外されると椅子に座るようにヒザを折られる。
そして粘液滴るヌル触手に力が込められると、頑なに閉じているヒザが少しずつ、しか

し強引に確実に、左右に引き割られ始めた。
「いや……離し、てえぇ……っ！」
スーツのパワーを奪われて、身体は性感で脱力をさせられている。そんな戦隊半裸少女の両脚が、怪人の強力な力で広角度に拡げられてゆく。
「うくくぅ……はぁ、はぁぁ…っ！」
（も、もう…やめてえぇぇ…！）
純白少女戦士の必死な抵抗を、淫らに楽しむクラゲダーク。
「ほぉらぁ、もっとガンバレガンバレェ。でないとぉ、おマ〇コまる見えだぞぉ」
「くっ……うぅう…っ！」
歯を食いしばって全力を込めると、少しずつ脚が閉じられてゆく。
（！　こ…この、まま……っ！）
「もぅいいかなぁぁ、ブシゥヒヒヒィ」
ヒャクホワイトが希望を持った瞬間、少女の心を見抜いてニヤける怪人。そして触手には更なる力が込められて、処女戦士の脚は一気に限界まで開かれてしまった。少女戦士の清楚な姫筋が、世界中の人目に晒される。
（――っ！　だ…誰にも見せた事のないあそこが、世界中の人たちに……）
女性の美しさと弱さの象徴であり、自身に対する愛しさとどこか頼りなさを感じさせる、

媚肉の割れ目。気丈だったハルカの心に、強制羞恥という大きな楔が打ち込まれてしまった。
「い、いや……いやよ…っ！」
尚もヒザを折られたまま脚を左右に開かれて、更に腰ごと前方に引っ張られる。羽虫カメラに集中されて、処女の桃色割れ目全体像が、全ての角度から近接撮影されてしまう。
（撮らな――はぁく…ぁそこ、撮らないでぇ…っ！）
更に新たな触手が伸ばされると、媚構左右の柔らかい媚肉が外側から引き開かれる。
「ゃ――っ！　触ら、ないで……ひっ…！」
くチュリ……。
（う、うそ、うそぉ……こんな……）
「ホォワイトのぉ、おマ〇コ大公開いぃ」
羞恥混乱する純白露出戦士は、拷問クラゲによって更に秘すべき媚処粘膜までもを強制公開をさせられた。
「ひ――ぁうぅ……！」
左右の媚肉は健康的に発育をして柔らかく、女体の暖かみと柔軟性を感じさせる。上端の肉芽は桃肉色に艶めいて、根本まで包皮を剥かれての完全露出。左右の花弁は繊細に薄く、女性器粘膜を囲んでいる。
処女粘膜はシワも少なく、中央で膨らむ針孔のような尿孔と数センチ下で閉じられてい

る膣孔は、自身から溢れた僅かな恥蜜で濡れ艶に包まれていた。
キツく閉じられた処女膣孔は極上の締めつけを確信させて、少ないシワで形作られた色素の薄い少女肛門と共に、視線の刺激に収縮をしている。
（ぁそこ…あそこが、みんなに……）
処女性器と肛門までをも、完全公開させられた戦隊少女。自分でも見た事のない秘処を、世界中の人たちに見られてしまった。
マスクの下の愛顔は余す処なく羞恥で上気し汗を吹き、大きなタレ目からは今にも涙が溢れそうになる。
恥ずかしくて隠れたいのに、淫電撃で浮かされた肉体は切なく身悶えさせられて、心臓は更に鼓動を速められてしまう。
心にヒビを入れられた少女戦士は、ダークゼロスの奸計で更に辱められてゆく。
十字架磔のホワイトは暗黒サディストの手でフルマスクの顎（あご）と額を撫でられる。更なる暴力の予感に思わず身を縮めた途端、純白の戦隊マスクが敵によって砕かれ始めた。
「ひっ――！」
メキリ、バリッ、バキビキリッ！
パワーを奪われた特殊硬材の戦隊マスクに、皇帝の爪が食い込まされる。逃れる術もなく一方的に、絶望的な破壊音を立てながら無数のヒビを入れられてゆく。

男性の暴力的な性行為に対し、肉体は充分な柔弾力で受け止め始めていた。
「んひゃぷ――はぁむ…はぁ、はぁくぷ…」
（く、口の中で……跳ねて、熱くて……）
マスクの下では自然に瞼が閉じられて、喜んでもらおうと唇も舌も、無意識に更に繊細な奉仕愛撫を捧げる。
たぷリムりゅむ、もみプるコロくりゅ。
Fカップの乳房が激しく揺れて、充てられたクラゲ触手に乳首を擦らされながら、重さと柔らかさを世界中に見せつけられる。
（あぁ……む、胸が…ぁそこが…っ！）
男性性臭に脳が蕩かされ、乳房の揺れ撫で刺激と相まって、硬化する先端媚突はその淫現象を一時も逃さず映し出される。
イヤらしくベルトを残されたままくねられる細腰と、前後上下に跳ねさせられる剥き出しの少女腰。色素の薄い菊肛と桃色秘処にも触手が充てられ、振らされる腰に合わせて触手撫でに晒されていた。
乳首と菊肛が触手刺激を味わわされて、心臓と子宮が熱鼓動責めに晒される。汗と恥蜜を溢れさせる女性器全てが、隠しようもない羞恥映像として撮影される。
捕らえられて半裸に剥かれ、跪かされて唇奉仕をさせられる、女として最も惨めな姿が

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

世界中の人々の目に晒されてしまう。
覗ける頬に流れる汗と、張りつく数本の黒髪。頭を中心に前後動させられる女体は滑らかで扇情的で、年若いながらも女体本来の持つ淫靡さを存分に発揮していた。
「処女の身でありながら、よい肉体だ。女として磨けば銀河一の性処理女になれるぞ」
ヒャクホワイトの恥姿に強い喜びを覚えたダークゼロス。口唇強姦は射精に向かって、更に抽送を速められた。
ヂュぷグゅぷずぷチゅっグゅプグュぷカブぷぢゅっ！
「はんん――ぁふ、くるひ――あむぷっ……はぁふむぅ…っ！」
（く、臭いのに、苦しいのにぃ……頭が、蕩けそう……っ！）
激しいイラマチオに乳房とお尻が跳ねさせられて、汗と恥蜜が内腿を伝う。口内の勃起が硬度と太さを一段と増すと、少女の肉体もつられるように熱を上げさせられてゆく。
肉体が屈し始めた戦隊少女は、暗黒の皇帝によって更なる羞恥へと追い詰められる。
「聞け、人間どもよ。この女、ヒャクホワイトの正体は日本人だ」
（――っ⁉）
敵の言葉に耳を疑い、思わず見上げるヒャクホワイト。ダークゼロスは強制口唇奉仕から逃れられない少女を、ニヤけて見下ろす。
その邪笑みで少女は理解させられる。全ては敵の罠。悪の皇帝は、イヤなら奉仕しろと

は言ったが、奉仕すれば秘密をまもるなどとは一言も言っていなかった。
（そんな…酷ぃ……）
獲物の驚愕表情を楽しんだ暗黒皇帝は、少女を更に追い詰めるべく言葉を続ける。
「本名は白鳥ハルカ。高等科二年に籍を置く少女だ」
「んひゃぅ……んぱっ、ひぁっひゃめへぇ――あぷん、んぐうぅ…っ！」
抵抗する口を勃起肉で塞がれて、更に個人が特定できる情報までもが大声で公開されてゆく。
「学校の名前は私立嬢ケ咲（じょうがさき）学園。住所はニホンのトウキョウ――」
（やめて…もぅやめてぇ……っ！）
カくプぢゅるュっ、ぶゅムぷぐゅぷっ！
学校名や住所、更に電話番号や自宅の写真までもが世界中に晒される。
イラマチオをさせられながら耳を塞ぐ事もできずに、ただハルカは絶望の底なし沼へと沈められてゆく。
「――ではそろそろ、正義の処女ハルカ嬢に男の味を教えるとしようか」
（男の味――っ!?）
――ずりゅトぷズッッ！
「んんんんっ――!!」

敵サディストの言葉を耳に刻まれ、少女の上顎から喉入口までが、一気に膨張した熱勃起で擦り犯された。そして――。

「出すぞ」

（――!!）

ダースゼロスが淫冷に笑い、戦隊少女の口内で侵略皇帝の射精が実行された。

どプびゅウウうううっ、ブゅぶどくッ、ブプっどくっどプびゅうぅッッ！

「んぐうむっ――んぶっあぶふぅっ……いいやぁっ――あぷんっ…んぐっんくぅ…っ！」

火傷させられそうな勃起肉から、熱臭い汚液が放たれる。海生生物と尿臭とカビを混ぜたような嫌悪臭と、塩と卵白と血液を混ぜたような塩鉄苦味を持った、粘度の高い汚精液に口内が満たされてしまう。

汚勃起を吐き出しそうになった口許が、皇帝の手で押さえられてペニスに密着をさせられた。射精の続くペニスで更に喉奥までを強姦される。

「ぁんぶ……んゃぷぐうぅ……っ！」

「吐き出すなよ、全て頂くのが女の義務だ」

放射された多量の精液に、上気した頬が膨らまされる。舌の裏側や内頬と歯の間に流れ込まれ、更に密着させられた唇からは溢れ出る事もできず、精液で喉を開けられて無理矢理溜飲させられてしまう。

こくり、こく、こくり――。
（いやぁっ――こんな、汚いぃ…っ！）
精液を呑まされる汚辱感で、理性が惨めに踏みにじられる。しかし口内と喉を穢す汚粘液に胃の中までが犯されると、少女の脳裏と子宮は更に強く、女の淫火を目覚めさせられてしまう。
（ぁ……こ、この…匂いぃ……）
口内を満たす精液に鼻腔が擽られると、脳の芯にモヤがかけられ、心臓の鼓動が更に熱を帯びて強められる。お腹に感じる精液熱に、同じ体内の子宮が飢餓感を煽られて、強い淫熱灼きに晒される。
嫌悪する口内射精と精飲なのに、瞳が蕩けて、鼻腔息が艶を帯びさせられていた。
「んん、んふ――んぱふうぅ、こくん……」
ペニスを抜かれて、更にマスクにも射精を受けさせられる。純白の仮面が白濁精液に汚されて、白粘液に垂れられる黒いゴーグル。
「次はオマエの顔だ！」
「か、顔って――ひぁぅ…っ！」
更に皇帝の手には力が込められ、ひび割れたマスクが破壊されてゆく。このままでは裸や本名と共に、辱められた素顔までもが公開されてしまう。

「ゃっやめてぇっ…マスクは――あぁっ！」
バキキッ、ブチバキリィッッ！
戦隊マスクが皇帝の怪力で砕かれると、遂にヒャクホワイトの正体である白鳥ハルカの恥辱上気素顔が、全世界に晒されてしまった。
目の前のモニター群には、世界中の人々が驚愕する顔が映されている。
「いやぁっ…見ないでえぇっ！」
背ける哀願はカメラに追われ、あらゆる角度から少女戦士の素顔が暴かれ映し出される。羞恥混乱するハルカの黒髪が皇帝に押さえられて固定されると、朱に染まる素顔にまで射精を受けさせられてしまった。
びゅうぅっドッぷぴュッ、ドぷんとぷん。
更に頬まで押さえられると口を開けられ、塞ぐ事すら許されなくされる。
「ぁふイャ――ぁくぅ……こく、こくん…」
少女の前髪が、鼻筋が、頬が、艶めく唇が、口内までもが、カメラの前で白濁まみれに穢される。更に淫熱に灼かれる処女肉体は、与えられた汚精液を無意識に、集団視線の前で呑み込んでいた。
ロリチックな顎ラインから唾液と混ざった精粘液が垂れ伸びて、剥き出しにされた双乳の上肌がヌメり穢される。

「よぅく似合うぞ、白鳥ハルカ。クックク」
（こんな事、されて……わたし……）
闘志も理性も、自身の身体に押し潰されてゆく。そんな戦隊少女の絶望姿に、ダークゼロスは更なる羞恥責めを実行する。
クラゲダークによって再び手足を触手巻きされたハルカは、絶望に呑まれそうな弱々しい闘志を必死に奮い立たせて抵抗をする。
「こ、今度は、なにをぉ……っ！」
一メートル程の高さで俯せにされて頭を前方に向けさせられたまま、両腕を前方拘束される。水泳のような姿勢にされて両脚を限界まで開かされて、ヒザを伸ばされて下前方まで屈曲をさせられた。
「痛、いぃ…」
開脚前屈姿勢のまま持ち上げられたような恥ずかしい姿勢。更にお尻を向けさせられたまま、腰掛ける皇帝の前に差し出されると、まるで自分からお尻を見せているような羞恥姿勢にされてしまった。
（あ、ぁそこが……隠せないぃ…）
少女恥処の全てが、これ以上ない程の開脚で羞恥公開に晒されてしまう。
若い張りを見せるお尻頬谷間で収縮する桃色媚肛と、矢印の最先端のように最も突き出

させられた濡れ処女秘唇。
更に開脚両腿に割れ目左右の柔肉が引かれ開かれ、内側から押し出されるように濡れた無垢粘膜が露出をさせられる。
……むにゆりぃ…。
処女秘処媚肉の柔らかさを見せつけるような恥露出に濡れる姫媚唇の反応が、世界中のモニターいっぱいにまで大写しにされた。
限界開脚の艶女尻を前にして、イヤらしい笑いを見せる暗黒の皇帝。
「女に最もよく似合い、そして最も屈辱的で恥ずかしい姿…それがこの、女の尻矢印だ。実ぅに、よい眺めだことよ」
「へ――ヘンタイぃ……っ！」
突き出させられたお尻頬が敵の淫手で撫で回される。擽るような触れ方にお尻肌が媚弱に刺激をされて、敵観察下の肛門と処女粘膜が恥ずかしげにヒクつかされてしまう。
尻矢印の恥姿で拘束された戦隊少女の肢体が、更にクラゲの触手に絡みつかれた。
「はくぅ…また、触手ぅ……っ！」
質量を増してロケット型にされた乳房が、濡れ触手巻きにされて揉み上げられる。乳房に垂れた皇帝精液が触手の淫液と混ぜ合わされて、塗り拡げられて乳房全体が更に精液まみれに穢されてゆく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/